

## 奨励

### 縁の下の力持ち

堂腰 きみ子	同志社幼稚園長
奨励者紹介（どうこし・きみこ）	

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らなさい。  
（ローマの信徒への手紙 一第二章一五―一八節）

### 陰でコツコツと

同志社幼稚園の堂腰でございます。このような場をいただいたことを感謝いたします。今日は「縁の下の力持ち」ということでお話をさせていただきます。最近あまり耳にしなくなりましたが、とても私の好きな言葉です。近ごろの家は縁側というのが少ないかもしれませんが、縁側の下の見えないところを言います。人間で言いますと、陰でコツコツとほかの人の支え、コツコツと努力する、目に見えない部分を活かしていくことです。生きていくなかで、とても大事なことですけれども、今の社会は、結果だけで評価をされてしまいがちです。一生懸命にその目的に向かってコツコツとがんばる、その過程が軽視され、結果がよければすべてよしというような社会的風潮のなかで、私は教育の現場にいる者として、そのことが、夢に向かって生きていくためには大切だということを、小さい園児たちに伝え、また、関わる保護者にも伝えていきます。しかし私たちは、現実には目に見えることに追いやられて、目の前にあるものだけを見て、毎日の生活が過ぎ去り、何か忘れられていることがたくさんあると思っています。

スポーツの世界でも、優勝すればそのときのヒーロー選手が脚光を浴び、インタビューを受けます。フィギュアスケートや、さまざまなスポーツのなかで脚光を浴びるのは、いつも目に見えて功績をあげた人、いいプレーをした人たちが、華やかに、皆に「よくやった、優勝だ」「おめでとう、君はすばらしい選手だ」と褒めたたえられる。でもそこにいるマネジャー、その選手を陰から見守っている人たちがいっぱいいるということをお忘れではありません。つい有頂天になってしまうと、いつか自分を陰で支えてくれている人たちの存在を忘れてしまいがちになると思います。

過去にラグビーで、日本一に輝いた伏見工業高校の山口良治監督（当時）の「スクール・ウォーズ」というビデオがあります。何回見ても私は感激いたします。「スクール・ウォーズ」にフーロという青年が出てきます。その青年は小・中学校でラグビーをしたことがなかったのですが、山口監督に憧れて、ただラグビーが大好きで入部した生徒です。選手たちのなかで、いつも怒られ、ほかの選手たちの邪魔をして、プレーがうまくできなくて、皆に、またか、またかと言われていました。しかしフーロは、何を言われても一つの夢を持っていました。山口監督の人間性にひかれていたけれども、自分は選手やチームに迷惑をかけるということで「マネジャーにしてください」と申し出ました。フーロは毎日、皆が、まだ寝ている時間に学校に行き、ボールを磨き、掃除をしている。それは誰も知らない姿です。監督は知っていたけれども、誰にも言わずにじっと見守っていました。フーロは選手たちの汚れたボロボロのユニフォームを洗濯したり、繕いをしながら過ごしていましたが、ある日、突然、白血病になりました。

そして、残念ながら優勝試合を見ないままに、彼は天に召されてしまいました。このチームが最下位から見事優勝したというすばらしさはもちろんのこと、それ以上に選手たちは心がひとつとなっていました。自分たちの得た栄光は、皆の力、そして縁の下の力持ちの支えのおかげ、ということ全員が思い、共に喜び、共に泣きました。チームのすばらしさは何だったか。自分たちが優勝したこととても喜びました。そのころは、公立の高校が優勝することは本当に珍しいことだったのです。選手たちは、優勝のトロフィー、写真を持って一番にフーロのところに行きました。「僕たちが優勝できたのは、君のおかげだよ」というシーンは、本当にすてきな光景で涙が溢れます。一つひとつの小さなことも、どこかで人が自分を支えてくれて、そして神様が見守ってくださっているということ、いつも忘れてはいけないと思います。

先ほど、学生聖歌隊のきれいな歌声を聞かせていただきました。皆さんには、夢がいっぱいあると思います。それぞれに、これから生きていく道で、自分にはどうしてもできないことがあったり、苦手なこともいっぱいあると思います。そのときに自分はどういうふうにして、それを克服して生きていくかと考えることも大切です。また自分に自信をもって、どんなことがあっても人に負けないという気持ちも大事だと思います。幼稚園の園児も人の見えないところで頑張っている場面がたくさんあります。いつもトイレのスリッパがきれいに並んでいる。知らない間に、園児がスリッパを並べ替えています。いつも私たちが「トイレが済んだらスリッパをきれいに並べましょうね。ごみが落ちていたら拾いましょうね」と言っています。言うことは、とてもたやすいことですが、それを守って実行することは、私たち大人でも難しいことです。いろいろな社会のルールを知ってそれを守って実行するよう毎日伝え、育てていくことが、私たちの役割だと思っています。要領のいい子どももいます。そのようななかで、その陰で、皆に見てもらわなくても、人がいないときでも、たった一人でトイレのスリッパを並べている子どももいます。そんな子どもを私たち大人が認めていく。そして、何に対してもそのような気持ちが大切であることを伝えていく。そういうことが積み重なって、人のため世のために役に立つ人間として成長してほしいと願っています。

### コツコツと努力しながら

私が水泳のコーチのお手伝いをしていたとき、印象的なことがありました。一人のコーチの方は、いつでも「トップを目指せ。目指すはオリンピック」というくらい、たたき込んでおられました。でもその子は、とてもしんどくて、水泳が始まると気分が悪くなったり、おなかが痛くなったりして身体でサインを示すようになっていました。しかし見学に来ているお母さんが喜んで、拍手をしている、自分のことをお母さんが支えてくれるということがわかっているから、それに応えようとして一生懸命努力していました。でも、その子どもは、とうとうお母さんの期待に応えきれなくなりました。

もう一人の子どもは、いつもビリでした。でもお母さんは「またビリやったね」ではなく「ビリでよかったね。ビリでいいんだよ。最後だからこそ、人を追い抜いていかな」といけな。十番でいいんだよ。そこから九番、八番になったらいいからね」と励ましました。そしてやがて、いつも最後の十番だった子どもは、オリンピックの代表選手に選ばれはしなかったけれど、選考会に参加するところまで、励ましによってどんどん成長しました。いつも一番をとっていた子どもは、もう息切れして、大好きだった水泳もどんどん力がなくなつて、やる気もなくなっていました。

結果だけを見て、私たちはつい「あまずごいな、あの人が、実力があるな」と見てしまう。そして職場でも、いい業績を上げたり、仕事をテキパキ片づけると「すごい」と言われる。結果はなかなか見えなくても、そこに毎日の努力があったら、自分の人生のなかで変わっていくと思います。いつも着飾っていたり、目立っていたりすることを求めていくことで社会に出ようとするのは、とても苦しいことだと思います。

### コツコツと人のために

どんなときも自分に自信をもって、コツコツとやる人になりたいな。何か力をつけていきたいな。「あの人の姿は、どこか光っているね」と言われるような人間として生きていきたいと思っています。お互いが思いやり、愛をもって行うことが大切なことだと思います。そして愛を受けられるには、自分自身がやはりおごってはいけないし、人の気持ちも知らなくてはなりません。その意識をもってそういう人間になろうとして生きていくことを、いつも心に留めていただきたいと思っています。同志社幼稚園の園児の保護者にも、それを伝えております。それを受け止めていただいている保護者、まだまだそれを受け止めていただけていない保護者もあります。この人は悲しそう顔をしているから、何か手を差し伸べてほしいのかなというとき、手を差し伸べられる人であってほしい。目に見えない数字の評価、偏差値ということではなく、心の教育を大切に、幼稚園は園児の成長を育てています。皆さんも周囲にも目を向け、自分自身の進むべき道をしっかりと見つけ、カリカリしないで、ひと呼吸して夢に向かって歩んでいただきたいと思っています。そして、お互いに思いやりをもって、共に喜びや悲しみを分かち合い、同志社人として心豊かな人間社会を作り、すばらしい学園としていくように励んでください。

二〇〇七年十一月六日 同志社スピリット・ウィーク  
火曜チャペル・アワー「奨励」記録